

恩

木下郁^{かきろ}先生の追悼式は、親族代表の岩田氏のお礼の言葉で終わった。二分にも満たない短いあいさつが一陣の風のように、さわやかに会場を流れ去っていった。若さあふれていただけではない、そのなかみが先生の面目を伝える格調高いものであったから。その一節に

「父は、ひとから受けた恩は一生忘れるな、ひとにしたことはすぐ忘れてしまえ、と私たちに日ごろ教えてきました」と。

先生が役員をされていた福祉法人「任運社」が設立した、騰々^{とうとう}舎の開所式で、先生にあいさつをお願いした。「私は県庁時代、吉田君にとってもお世話になりました。今日は吉田君が精魂をこめた重度障害者施設の開所式というので、どうしてもご恩返しをしなければと思つて、老体ではありますが、まかり出たしだいです…」

県庁時代私は、先生に後始末ばかりしていたたく不肖の部下であったのに、こんな言い方をなされるとは、お心は何と広く温かいことか。

先生の晩年、愚息の仲人をしていただいた。後日その嫁がごあいさつに上がったら、逆に川魚をちようだいし、私に見せに立ち寄った。きれいなかごにセロハン紙を敷き、さらに大ザサの葉にくるむといった見事な包みであった。

後日、先生はそのことを「あれは川魚の強いにおいを消すための葉だったが、若い子たちに遠回しに教えたつもりだ」と温顔で話された。一見してわかる幼い嫁のしぐさに、無言の教えをしておこうと思われたのであろう。嫁よりも私の方こそ一番学ばねばならぬことである。

第一回移動県庁が成功裏に行われた時、竹田津（国見町）の夕焼けの中で、先生は「ありがとう」と大きな手で握手をして下さった。晩年、そのことを申したら、覚えていないといわれた。私の得意そうな内心の動きを察知されて、「しらん」といわれたにちがいない。大きな心の中で、私は動き回って得意だったわけである。

（一九八〇年七月三十一日）